

脳出血発症後 5 年以上経過し、跛行が残存していた症例に対し

足関節コントロールに取り組んだ事例報告

小林 由佳, 風間 俊幸
新座病院 リハビリテーション科

【目的】脳血管障害による片麻痺の治癒過程では、一般にプラトーに達する目安が 3 カ月とされている。また上肢と比較した場合の下肢の予後は良好と言われる。しかし実際には足部のコントロール不良で跛行が残存している場合が見られる。今回、5 年以上前に脳出血発症により片麻痺を呈し、足関節内反を伴う跛行が残存する症例を担当した。そこで、足関節緊張コントロールへの介入により、歩容の改善が見られた。発症後長期経過した本症例への介入により改善した点についての考察を報告する。

【説明と同意】報告にあたりご本人ご家族の同意を得ており、倫理面に配慮しデータを扱った。

【方法】症例は 50 歳代女性。既往歴に 5 年以上経過した脳出血後遺症の右麻痺があり、Brunnstrom recovery stage は上下肢 V 手指 VI であった。発症当時 50 日程度の入院リハビリテーション治療の後、ADL 自立・歩行独歩自立にて自宅退院した。今回は転倒受傷による右大腿骨頸部骨折後のリハビリテーション目的での入院である。入院時の ADL は起居動作・セルフケア自立・院内での T 杖字歩行自立レベルであったが、術創部周囲の疼痛残存・筋協調性低下による応用動作不安定のほか、右足関節内反を伴う跛行が見られていた。術創部周囲の問題点は疼痛軽減により 1 ヶ月程で改善したが、跛行は残存しておりその改善に取り組んだ。症例は静的座位でも右足関節内反筋緊張が見られていた。その状態への症例の感覚認識を確認するため足部の左右差を聞くと、足底接地面や、足関節緊張状態の差に気づき、その過程で右足関節内反筋緊張の緩和が見られた。そこで症例が足部の状態に意識を向けることで右足関節内反筋緊張緩和が得られ、跛行の改善につながるのではないかと仮説を立てた。介入として端座位や立位で、静止時及び足関節運動時の右足関節の筋緊張や足底接地面の変化を感じ取ることに意識を向けてもらった。

【結果】静止時や運動時の足部の変化に意識を向ける過程で右足関節の緊張緩和が得られ、その後の歩行では右足関節内反に軽減が見られた。また、歩行距離延長時にも出現していた右足関節内反の筋緊張亢進に自ら気づき、緊張亢進前にセルフコントロール出来るようになる等の改善があった。

【考察】脳出血発症後長期経過例であったが、足部の状態に意識を向ける過程で右足関節内反の緊張緩和が得られた。それを跛行の改善に利用できたと考える。また自らの身体に注意を向け変化に気づくことが出来た症例の特徴が、これらを治療に利用できた一要因であると考ええる。

【理学療法学研究としての意義】脳出血発症から 5 年以上経過例に残存した、筋緊張コントロール不良による跛行に、改善の余地が残されていたことを経験した。今後もこのことを念頭に取り組んでいきたい。